

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、①～⑮は形式段落の番号です。)

① 植物たちは、自分たちの食糧しょくりょうだけでなく、地球上のすべての動物の食糧まかなを植物たちに依存いぞんしています。「私たちを含めて、動物が食べているものは何か」と考えてください。それは、植物たちのからだである葉や茎くき、根や実などです。「植物を食べずに、肉を食べている動物もいる」と思う人があるかもしれません。たとえば、「肉食動物」といわれるライオンやチーターは、シマウマなどの肉を食べて生きています。また、タカやワシは、ウサギなどを食べて生きています。

② 1、その食べられる動物の肉は、「何を食べてつくられたのか」ともとをたどれば、まちがもなく植物たちのからだに行きつきます。シマウマやウサギなどは、草食動物であり、植物を食べて生きています。ですから、「すべての動物は、植物たちのからだを食べて生きている」ということになりました。

③ このように、植物たちは、すごい生産能力で、すべての動物の食糧をつくり出しています。しかも、動きまわることがないので、動物によく食べられます。「動物に食べられる」ことは、植物たちが逃のがれることのできない宿命なのです。もし植物たちが、逃にげまわることができ、動物に食べられることを完全に拒きよ否ひできるとしたら、すべての動物は生きていけません。

④ しかし、植物たちは、そのようになることを望んでいないでしょう。植物たちは、「少しぐらいなら、動物にからだを食べられてもいい」と思っているはずですが、なぜなら、「動物に生きていてほしい」からです。

⑤ 植物たちは、花粉を運んでもらうのに、虫や鳥などの動物の世話になります。また、動物のからだにくつついてタネを運んでもらいます。動物に実を食べてもらうのは、何よりも大切なことです。食べてもらえば、実の中にあるタネを糞かんといっしょにどこか遠くに排泄はいせつしてもらえます。2、食べ散らかすようにしてタネをどこかに落としてもらえます。

⑥ いずれにせよ、動物に実を食べてもらうと、植物たちはタネをまき散らしてもらえるのです。これらは、動きまわることのない植物たちにとっては、生活の場を移動するのに役立ちます。また、生活の場を広げるのに必要なことです。植物たちは、動きまわることがないので、生活の場を移動したり、生活の場を広げたりする、すごいゝ術じゆつを身につけているのです。

⑦ 動物にタネをまき散らしてもらうのは、植物たちにとって、生活の場を移動するのに役立ちます。しかし、「なぜ、植物たちにとっては、生活の場を移動するのがいいことで、(3)同じ場所で暮らすことはよくないことなのか」あるいは、「植物たちにとって、すでに暮らしている場所で子どもたちが引き続き暮らしていくことは、よくないことなのか」という疑問が浮かぶかもしれません。

⑧ もしタネをまき散らしてもらえなければ、植物たちはどうなるでしょうか。何代も何代も同じ場所で暮らさねばなりません。これは、植物たちが繁栄はんえいしていくためには、よくないことなのです。3、多くの野菜は、毎年、同じ場所で栽培さいばいされると、成長が悪くなったり病気になったりします。だから、私たちは、毎年、同じ場所と同じ野菜を栽培する「連作」を避けねばなりません。

⑨ ナスやトマト、ピーマンなどは、連作を嫌いやがる代表的な野菜です。4、連作すれば、生育は悪く、病気になることが多いのです。うまく収穫しゆっかくできるまでに成長したとしても、収穫量は少なくなりません。「連作障害」といわれる現象です。

⑩ その原因は、いろいろ考えられます。一つは、同じ場所で同じ種類の植物が栽培されていると、その種類の植物に感染する病原菌びんきんや害虫がそのあたりに集まってきて、病気になりやすくなることです。また、毎年、同じ養分を吸収するために、その種類の植物に必要な特定の養分が少なくなることです。さらに、植物が根から排泄物を出していることがあり、それらが蓄積ちくせきして成長に害あを与えることです。

⑪ こんな理由で多くの野菜は、連作されるのを嫌がるのです。野菜以外の植物たちも、野菜と同じしくみで生きています。そのため、ほかの植物たちにとっても、同じ場所で続いて暮らしていくことはよくないことなのです。

国語問題

(十一枚のうちの二枚め)

⑫ 私たち人間の場合には、親の地盤が引き継がれることはよくあります。特に、国会ギイン^①に立候補する場合には、親の地盤がそのまま引き継がれます。当選する可能性が高いからです。だから、私たち人間にとっては、「親の地盤を引き継ぐ」というのは、利点があるような印象を受けます。でも、植物たちにとっては、親の地盤を引き継ぐことは、よくないことなのです。

⑬ 植物たちは、子どもたちが親の地盤を当てにせずに、親とは別の場所で生きていくことを望んでいます。その思いを込めて、子どもたちを親の地盤から新天地へ送り出すのです。新天地といえば聞こえはいいのですが、生きていけるのか生きていけないのかがよくわからない未知の場所です。

⑭ 「ライオンは、生まれた子どもを千尋^注の谷につき落として這い上がってきたものだけを育てる」といわれます。ほんとうは、ライオンはそんなことはしないようです。この言い伝えは、「そのような育て方をしないと、『百獣の王』といわれる強いライオンにはなれないのだ」という、子どもを鍛えあげることの大切さを説くためのものでしょう。

⑮ しかし、植物たちは、タネができればと、強い子どもが育つように、子どもたちを新天地へ放り出すのです。「どんな環境に出会っても、強く生きていってほしい」との思いが込められているのです。新天地へ放り出される子どもたちも、その期待を担って親元を離れていきます。植物たちの「親離れ」「子離れ」のよさは、すごいのです。

注 千尋の谷…非常に深い谷。

(田中 修「植物はすごい」による)

問一 線部①のカタカナを漢字に直し、②・③の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 本文中の 1 2 3 4 に入れるのに最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。
ア あるいは イ しかし ウ もし エ つまり オ たとえば

問三 線部(1)とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 線部(2)とありますが、筆者がこのように考える理由を、四十字以内で説明しなさい。

問五 線部(3)とありますが、植物たちにとって「同じ場所で暮らすことはよくない」のはなぜですか。その理由をまとめている段落を本文中から探し、形式段落の番号で答えなさい。

問六 線部(4)とありますが、

(I) どのような点で「すごい」と筆者は考えていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 植物たちは動物たちに食べられても同じ場所で懸命に生きていくという点。
- イ 植物たちは子どもが安全に育つようにわが身を動物に与えているという点。
- ウ 植物たちは親と違う未知の場所に行ってもたくましく生きていくという点。
- エ 植物たちは子どもをわざと危険にさらすことで強いものを選んでいくという点。

国 語 問 題

(十一枚のうちの三枚め)

(Ⅱ) この植物たちの『親離れ』『子離れ』のよさ」と共通する内容の言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 親の心子知らず
- イ かわいい子には旅をさせろ
- ウ 虎穴こけつに入らずんば、虎子こじを得ず
- エ 親の七光り

問七 本文の表現の特徴として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 植物の説明に擬人法ぎじんぽうを用いることで、読者が植物に対してより親しみを感じるような工夫がされている。
- イ 植物と人間の性質に共通する部分があることが、具体的な例を通してわかりやすく説明されている。
- ウ 動物の特性と植物の特性を比較ひかくすることで、植物のほうが自然の中で適応する能力が高いことが印象づけられている。
- エ 植物の特性をくわしく説明することによって、植物がいかに関人の生活に役立っているかが強調されている。

問八 本文は内容のうえで大きく二つに分けることができます。後半の始まりの段落を形式段落の番号で答えなさい。

国 語 問 題

(十一枚のうちの四枚め)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学一年生の「あたし(さゆき)」と「テツ」、五才年上の「真ちゃん」は幼なじみの関係である。学校を休んだ「テツ」を心配して、「あたし」は「テツ」の家を訪れた。

「あらまあ、さゆきちゃん、わざわざきてくれたの？ どうもありがとねえ。それがテツったら朝は部屋でゴロゴロ寝てたのに、さっきのぞいてみたらいないのよ。まったくどこをほっつき歩いてんのかしら、学校休んで。本当にしようがない子だねえ、さゆきちゃん、勉強教えてやってね」

息もつかせぬスピードでおばさんはしゃべりだした。

「おばさん。テツ、本当にかぜ？」

たじろぎながらあたしが、ききづらいことを思いきってたずねると、⁽¹⁾

「アハハ、ありゃあ、仮病だね」

おばさんは豪快に笑う。

「でもね、仮病だったって、りっぱな病気だよ」

「病気？」

「そう、心の」

「……………」

「でも、こうやってさゆきちゃんがたずねてきてくれるうちは安心よ。だいじょうぶ、きつと明日になったらケロツとしてるから、あの子は」

そういっておばさんは、右手であたしの頭をポンとたたいた。

大きくて、あったかい手。

この手の中で育てられたテツは、もしかしてあたしが思っているよりも、ずっと強い子なのかもしれない。

一瞬、そんな気がした。

「それにしてもあの子、本当にどこいったのかしらねえ。もうこんな時間だっていうのに……」

夕暮れの空を見あげて、おばさんがふっと不安げな表情を見せる。

「だいじょうぶだよ、おばさん。あたし、知ってるから、テツのいるところ」

あたしは自信をもっていった。

⁽²⁾ 家にいないとなると、絶対にあそこだ。

「えっ、どこ？」

⁽³⁾ まんまるい目をパチパチさせるおばさんに、

「秘密の場所」

なぞの文句を残して、あたしは駆けだした。

秘密の場所にむかって。

(中略)

この小さな町をいちばんきれいに見わたせる小高い丘。人家から離れているせいか静かで、よけいな物音がまったく聞かない。一面をおおうたくましいペンペン草。

そこが、あたしたちの『秘密の場所』だった。

そこから見える景色は最高で、雪のフタつぎの朝や、木の葉が紅く染まる季節なんかは、本当に胸がドキドキするくらい町がきれいに見えた。

この丘は、あたしたち三人だけのものにしようね。ほかの人に教えるのはもったいないよ。

国 語 問 題

(十一枚のうちの五枚め)

注 いつものまにかそんな約束をした。

テツをむかえにいつてからあたしたちは、日が暮れるまでいつもその丘で遊んだ。

やっぱり。

テツはそこにいた。

何年かぶりにきた丘の上、ひざをかかえたテツの小さな背中があった。

ぼんやりと町を見おろしているテツ。

「テツ」

いきなりよびかけると、テツの背中がピクンとふるえた。

「さゆきちゃんっ！」

ギョツとした顔でふりむいたテツ。やがて、うつすらと笑った。

「よくわかったね、ここ」

「そりゃそうよ。あんた、ちっとも変わってないんだから。いじけたときにくる場所まで昔のまんま」

いいながらあたしは、テツのとなりにペタンと腰こしをおろした。

「もう、いじけてないよ、ほく」

町に顔をむけたまま、テツがつぶやく。

「決心したんだ。ほく、もっと強くなるって」

「……やっぱりあんた、熱でもあるんじゃない？」

「そんなじゃないよ。本当に、本当に、強くなるんだ」

「どうしたの？ いきなり」

前かがみにあたしが、テツの顔をのぞきこむと、

「昨日、きいたよ、真ちゃんから」

テツは表情をぴくりともさせず、キョウ②に口だけを動かしていった。

「東京にいくんだってね、真ちゃん」

どきどき③とシンゾウが、せわしなく音をたてはじめる。

今日一日、そのことをできるだけ考えないようにしていた、わすれようとしていたあたしの努力は、この瞬間しゅんかんにパーになってしまった。

「ねえ、さゆきちゃん、真ちゃんの歌、きいたことある？」

「あるよ、一回だけ」

あたしはコクンとうなずいた。

あれは真ちゃんが高校受験をすっぱかした夜だった。

おじちゃんになぐられたらしく、右のほっぺを赤くはらしてうちにきた真ちゃんは、

「昨日の夜、すっぱーいい曲ができたんだ。だれかにきいてほしくってさ」

ケロツとした顔でそういうと、あたしの部屋で自作の歌をうたいだした。

むずかしい言葉ばかりで歌詞はよくわからなかったけど、うたっている真ちゃんしんけんの目は真剣で、はれたほっぺがいたいたしくて、きいているうちにあたしはなんだか泣きたくなった。

真ちゃんは本当に、心から歌が好きなんだな……。

そのとき、そう思ったつけ。

そしてあたしも真ちゃんの歌が大好きになった。

「ほくね、昨日はじめてきいたよ、真ちゃんの歌」

国 語 問 題

(十一枚のうちの六枚め)

テツがちよつと得意げにいった。

「昨日の夜、真ちゃん、うちにきたんだ。ぼくそのとき落ちこんで……いじめられるのなんかなれてるけど、でもどろぼうとか、家の悪口とかいわれたのがくやしくて。そういう話、真ちゃんにしたら、そしたら真ちゃんがとつぜん……」

「とつぜん?」

「おまえ、もつと強くなれ、つて」

「……………」

「おれ新宿しんじゅくに行くから、おまえ、もつと強くなれつて、真ちゃん……。きつとさゆきちゃんのためだよ」

「あんたのためでしょ」

「ん……。でもそれだけじゃないよ。真ちゃん、自分が遠くにいくもんだから、だれか強い人をさゆきちゃんそばにおいときたいんじゃないかな」

「そんな……」

「そうだと思うよ。ぼく、勉強はダメだけど、そういうのはわかるよ」

「……………」

あたしは Pruitt とそつぽをむいて、うるんできた瞳ひとみをかくした。

⁽⁴⁾ 春のひなたぼっこみたいなテツの声は、あたしの中のどこかで凍りこみついてた涙なみだをじわじわとかしていく。

「ぼく、約束したよ、強くなるつて。それから真ちゃんにうたつてたのんだんだ。新宿にいつちやうまえに真ちゃんの歌がききたくて……。真ちゃん、てれながらうたつてくれた。ジンジンしたよ。ぼく、好きだなあ、真ちゃんだね。だからさ、さゆきちゃん……」

クルツと首をまわして、テツがあたしの目をのぞきこむ。

「さゆきちゃん、真ちゃんのこと、引きとめたりしないよね。東京の、キラキラした街で好きな歌、いっぱい、うたわせてあげようよ」

「……………」

じわつと右目に涙がうかんで、つられたように左目からも涙がぼろりとこぼれる。こらえても、こらえても、止まらない。

「真ちゃん、さゆきちゃんのこと、すごく心配してたよ。さゆきちゃんは一見たくましいけど、じつはぼくよりデリケートなんだつて、本当?」

「ばかっ」

テツの頭をばこんとたたいてから、あたしはワーワーと声をあげて泣きだした。

あたしがいかないと泣いてたのんだら、真ちゃんは新宿に行くのをあきらめてくれるかもしれない。弱虫だったテツをおいて、高志たかしくんたちと遊びにいけなかったみたい。こつそりとこの場所に、もどつてきてくれるかもしれない。

でも、そんなこと、できないよ。

真ちゃんはなによりも歌が好きで、あたしは歌の好きな真ちゃんがだれよりも好きなんだから。

「もう泣かないでよ、さゆきちゃん」

なかなか泣きやまないあたしに、こまったようなテツの声。

「ぼく、真ちゃんのかわりに強くなるから。今日もね、学校休んでここにきて、町にむかつてずつとつぶやいてた。強くなるぞ、強くなるぞ、つて」

「あんななんか百人いたつて、真ちゃんにはかなわないわよ」

国 語 問 題

(十一枚のうちの七枚め)

むくつと顔をあげていうと、テツはちょっと考えてから、

「うん。でも、いないよりはマシだと思うな」

ばかみたいにまじめな顔をしていうので、あたしはおかしくなつてぷつと笑った。

なんだか、変。

⁽⁵⁾テツを上げますつもりで、ここにきたのに……。

「帰ろう」

テツが立ちあがって、ズボンをパタパタはたく。

「うん」

あたしもしゃきんと背をのぼして、ひさしぶりに町を見わたした。

夕焼けはもうすっかり闇の中。

ちらほらと顔をだしはじめた星と、町のかすかなネオンの光。

どこか遠くで犬の鳴き声がかきこえる。

「もう、しばらくここにはこないかも」

小さな声でつぶやくと、となりでテツがこつくりうなずいた。

「でも、ここから見える景色は、変わらなければいいな。十年後も、百年後も、このままずっと」

「うん。千年後もね」

顔を見あわせて笑ってから、あたしたちは町の中へともどつていった。

(森 絵都「リズム」による)

注 テツをむかえに……小さい頃は、仲間外れにされたテツを、「あたし」と真ちゃんはいつもむかえに行っていた。

問一 —— 線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部(1)とありますが、なぜ「ききづらい」のですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「あたし」は、テツが学校を休んでいる理由がかぜではないと思っていたが、それをはっきりと知るのがこわかったから。

イ 「あたし」は、テツがかぜで学校を休んでいると信じて疑わないおばさんを混乱させたくなかったから。

ウ 「あたし」は、テツがかぜで学校を休んだとは思っておらず、おばさんの前でそれを話題にすることがためらわれたから。

エ 「あたし」は、テツと幼なじみであるのに、学校を休んだ理由を知らないことが恥ずかしかったから。

問三 —— 線部(2)とありますが、

(Ⅰ)「あそこ」とはどこのことですか。本文中から二十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

(Ⅱ)「あたし」がこのように考えたのはなぜですか。説明しなさい。

問四 —— 線部(3)から読み取れる「おばさん」の気持ちとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 期待 イ 喜び ウ 不安 エ 驚き オ あせり

国語問題

(十一枚のうちの八枚め)

問五

——線部(4)とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア テツの温かな言葉によって、「あたし」は真ちゃんが東京に行ってしまう悲しみを乗り越えられるようになったということ。

イ テツの温かな言葉によって、「あたし」は真ちゃんがいなくなることを素直に悲しめるようになったということ。

ウ テツののんびりした話し方によって、「あたし」は真ちゃんがいなくなるのが現実のことではないように思われ、悲しみが和らいだということ。

エ テツののんびりした話し方によって、「あたし」は真ちゃんが東京へ行くことの意味を落ち着いて考えられるようになったということ。

問六

——線部(5)とありますが、「……。」で省略されている「あたし」の言葉を、考えて答えなさい。

問七

……線部とありますが、ここから読み取れる「あたしたち」の気持ちを説明しなさい。

問八

本文についての説明として、あてはまるものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア テツの「心の病氣」を心配して悩んでいたおばさんは、「あたし」がたずねてきたことで、明るい気持ちになった。

イ これからは真ちゃんの代わりにテツのことを頼っていいという安心感が、「あたし」を温かい気持ちにさせている。

ウ 「あたし」はテツと話をするうちに、真ちゃんの歌への強い思いを理解し、それを尊重しようと思うようになった。

エ ひらがなを多く用いることで、優しい世界を印象づけるとともに、「あたし」とテツの幼さを強調している。

オ 会話文以外の箇所にも、「あたし」の思いが話し言葉を用いて表現されており、読者が「あたし」の気持ちに寄りそいやすくなっている。

カ 「……」を多く用いることで、お互いの気持ちをうまく通い合わせることができない「あたし」とテツの様子を表現している。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「幸」という漢字の中に「辛」という字が含まれていると言った詩人がいます。「辛い」ことを乗り越えれば、「幸い」にたどり着けるといふことでしょうか。

「禍福はあざなえる縄のごとし」と言いますが、生きていけばいいことばかりというわけにはいきません。

嫌いなヤツにイヤミを言われた。望まぬ部署に異動になった。転んでけがをした。自転車を盗まれた。あるいは交通事故や大病といった大きなことも人生には待ち受けています。

そのつど腹を立てたり、思い悩んでみたり。なんでも気の持ちようだとわかつてはいるのですが、気分を変えるのはなかなか難しいですね。

ところが臨床心理学者の河合隼雄さんが書かれたものを読んでいたら、思わず膝をたたきたくなる感を覚えまして。これがじつにいい知恵なのです。河合さんがお書きになっていたのはこういうことです。

ひよつとしたら人間は禍(わざわい)も福(しあわせ)も、神様から与えられた数だけ持つて生まれてきているんじゃないか。

たとえば、神様のノートを開くと人物名があつて、それぞれの禍には「町でひやりとする事故・十五回」「人と大げんか・十回」とか書かれている。横断歩道を渡つていてあやうく事故になりそうな目にあつたら、気分を悪くするのではなく「事故が一つ減った」と考える。誰かとけんかをして、おもしろくない気分のまま一日を過ごすのではなく、「これであと九回になった」と思う。

どうです、気分がころつと変わるでしょう。「災いを転じて福となす」というのは案外こういうことなのでは、と河合先生はおっしゃっています。

(近藤勝重「一日一杯の読むスूप しあわせの雑学」による)

問一 —— 線部の読みをひらがなで答えなさい。

問二 —— 線部(1)とありますが、これはどのような感覚のことですか。それを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の未熟さに恥ずかしくなる感覚。
- イ 思いがけない出来事に驚く感覚。
- ウ 相手の意見に納得する感覚。
- エ 自分の間違いに気づき、反省する感覚。

問三 —— 線部(2)とはどういうことですか。それを説明した次の文の 1・2 に入れるのに適当な表現をそれぞれ答えなさい。

人間は と考えることで、よくないことがあつた時には と思ひ、気分を変えることができるということ。

